

kirikoの童話集

◆ もくじ

お日様の火つけ番……………	5
くねくねとびっちゃん……………	15
ハロウインのおに……………	31
ふたば……………	39

まがったおへそ……………49

みずたまりのたにし……………65

ワシとねずみとトラ……………73

絹羽根のちよう……………85

春ちゃんのおつかい……………95

父ちゃんのかばか……………119

変身きつねのマイケル……………127

お日様の火つけ番

ある日、カエルが朝起おききると「火つけ回覧板」と書かれた紙がポストに入っていました。その回覧板には「今度の日曜日、あなたがお日様に火をつけることになりました」と書いてありました。カエルがこの町ではじめてお日様の火つけ役やくになったのです。お日様に火をつけると一つだけ願ねがいをかなえてくれるため、カエルが何をお願いするのかと町中でうわさになっていました。すると、うわさを耳にした一匹のキツネがカエルにこういいました。

「火つけ役はぼくが代かわろう」

このキツネの名前はウソといました。町中でうそばかりついてはみんなをだましていたので、みんなはうそつきウソとっていました。

「カエル君は歩くのがおそいだろ。もし、火をつけるのがおくれたらお日様が怒おこって、カエル君をも燃もやしてしまうんだって」

そういつてウソはカエルをおどろかせ、火つけ役をとってしまいました。うそとは知らないカエルは親切しんせつに教えてくれたキツネにお礼れいをいいました。まんまとカエルをだまして火つけ役になったウソはお日様に火をつけるなら一番おしゃれな服ふくをきて行

こうと思い、町で一つしかない小さなお店に入りました。ウソは店員てんいんさんに、この店で一番高い服を注文したいといいました。ところが、カエルから火つけ役をとったウソには服を売うらないとことわられてしまいました。ウソは腹を立てましたが、良いことを思いつきました。ウソはえらそうに一つ咳せきばら払いするとこういいました。

「ぼくがカエル君から火つけ役をとったと思っっているだろうけど、とったんじゃないよ。カエル君の代理だいりなんだ」

すると店員さんはこういいました。

「それじゃ、服を注文ちゆうもんしてもいいわよ。ただし、あなたがカエル君に見える服ならね」それを聞いたウソはがっかりしました。カエルの姿すがたではお日様に自分だと分かってもらえないからでした。

次の日、服は出来ました。それは、全身がカエルと同じ緑色でした。しかも、飛び出した目のついた帽子ぼうしと水かきのついた手ぶくろつきでした。鏡かがみを見たウソはカエルと同じ姿にはずかしくて思わず顔を覆おおいました。

一度もお日様山へ登のぼったことがないウソは歩いてすぐにつかれてしまいました。い

くら自分のお願いを聞いてもらうために火つけ役になったといつても、頂上ちやうじやうはまだまだ先でした。ウソは大きなあくびをしました。それは、昨日きのうの夜中まで服をぬつていたのでした。ウソは新しい服にきがえると、今まできていたカエルの服を道みちに捨てました。すると、気分がスツとしました。きがえた服は緑色のジャージでした。本当はもつとキラキラな服がよかつたのですが、店員さんが売ってくれなかつたので、しかたなく家にあつた緑色のジャージに金色のキラキラモールをつけたのでした。ウソはしばらくは足どりも軽く歩いていましたが、何かがたりないような気持ちになりました。ウソが気になつたのは道に捨てたカエルの服でした。ウソはどうして気になるのか不思議ふしぎでした。でも、何も知らないカエルにうそをついてまで、自分の願ねがいをおこなえようとしている自分の心が痛いたくなつたのが分かりました。ウソがこんな気持ちになつたのははじめてでした。

カエルの姿すがたに戻もどつたウソは深い森に入りました。でも、入つたとたん急に一人ひとりが怖こわくなりました。ここでは何があつても、だれも助けてはくれないからです。

「だれも助けてくれないのは町だつて同じだ。だつて、おれはうそつきウソだから